

# で あ い



公益社団法人  
北海道国際交流・協力総合センター  
HIECC／ハイエック

Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

北海道国際交流・協力総合センター（HIECC）では、北海道教育大学の大津副学長（日本国際理解教育学会常任理事）による監修及び指導、また開発教育の実践者である開発教育ファシリテーターのご協力のもと、道内の高校生を対象に開発途上国へのスタディツアーを含む人材育成事業を平成22年度より実施。今年度は10名の高校生が2回の事前研修を経て8月にカンボジアを訪問し、現地で活動するNGO訪問や、不発弾処理現場の見学、またNGOが支援する子どもの交流などを経験した。



ガイドが語るカンボジアの歴史に心を痛めることも

の除去活動の現場では、未だに戦争の負の遺産を背負いながらカンボジアの人が生活しているという現実を目の当たりにした。また、ポルポト政権時代に虐殺の舞台となった視察先では、家族6人を失いながらも激動の時代を生き延びた語り部の方に、「あなた方は日本人に生まれてラッキー」と言われ、溢れ出る涙を止められなかつことも。

スタディツアー中は、毎日ホテルの部屋で振り返りの話し合いを行い、日々の中で感じた怒りや悲しみ、また喜びの感情をありのまま語り合い、現地でだからこそ悩み考えたことを仲間同士で深め合っていた。

## 心が揺さぶられた瞬間

カンボジアの子どもや村の住民と交流する機会も。事前研修で準備した踊りやゲームを高校生が心を一つにして紹介すると、老若男女問わずに大盛り上がり。炎天下の中で汗まみれになって、大声で笑ったり、手を繋いで一緒に走り回ったり、話せるのはクメール語の挨拶や数字だけでも、言葉の壁を超えて心の距離はどんどん近くなっていた。

ツアーの後半に訪れた子どもたちが暮らす施設では、大ヒット映画の曲「Let it go」を日本語で歌ってくれた。歌詞を見ずに部屋中に響き渡る大きな声で歌ってくれる姿に、みるみる潤む高校生の目。子どもたちからの思わずサプライズに、「オーケン」（ありがとうの意）を震える声で伝えるしかできなかった。訪問の時間は短く限られていても、それぞれの訪問先でかけがえのない時間を過ごしていた。別れ際にカンボジアの子どもたちをギュッとハグしていた高校生の顔を伝っていたのは、汗か涙かわからないほどだった。



5人で心を一つに 室蘭市内の高校で報告会



子どももおじいちゃんも一緒に「ソーラン！ソーラン！」

## カンボジアで見て、考えて、感じたこと

移動日を含めて8日間のカンボジアスタディツアー。期待と不安が入り交じる中いざ現地へ。熱気に覆われたこの地で10名の高校生はどういう経験をしたのだろうか。

事前学習などからカンボジアには様々課題があるとわかっていても、現実は想像をはるかに超えていた。家の近くに中学校がないため、風雨もしのげないような粗末な学生寮で生活する中学生との出会い。「学校で学べる」ありがたみを痛感せずにいられなかつた。不発弾や地雷

の除去活動の現場では、未だに戦争の負の遺産を背負いながらカンボジアの人が生活しているという現実を目の当たりにした。また、ポルポト政権時代に虐殺の舞台となった視察先では、家族6人を失いながらも激動の時代を生き延びた語り部の方に、「あなた方は日本人に生まれてラッキー」と言われ、溢れ出る涙を止められなかつことも。



一生忘れられない子どもたちとの出会い

## 帰国後の活動、そして活躍

帰国後は2回の事後研修を経て、5人編成で2グループに分かれ所属する高校や母校の中学校で報告会を実施した。カンボジアで笑い、涙し、葛藤したことをどう伝えるか。2か月間悩み抜いて作り上げた原稿に心を込めて報告会で語っていたが、人前で話す緊張からか思いを上手く伝えられず悔し涙を流すことも。しかし、「少しでもカンボジアのことを伝えたい!」という一生懸命な姿勢が、多く中学生や高校生の心に響いていた。

スタディツアー中に一人ひとりが感じたことは様々。だからこそ、高校生がこれから築く「架け橋」には、未来の北海道とアジアを繋ぐ多様な可能性が秘められているかもしれない。

## 特集

# 高校生が見たカンボジア

—平成26年度高校生・アジアの架け橋養成事業—

# 私の国際協力活動日記

第9回



派遣地域の子どもたちと(右端が筆者)

松原有希さん

派遣先のブラジルは未知の大國。サンパウロからバスで8時間の活動先は、イタリア系、ウクライナ系民族、原住民（インジオ）が住む街だった。ブラジルは移民国家で多民族文化が共生しており、日本からも、多くの移民が海を渡った歴史があり、今や150万人もの日系人が暮らしている。

私は日系日本語学校教師として午前は幼稚園、午後と夜間は日本語学校で2年間活動をした。園児15人の幼稚園は、ラジオ体操から始まり、約2時間おゆうぎや日本の歳時記工作などを行いながら日本語を学ぶ。驚くことに授業はすべて日本語で進む。午後は40人の児童が放課後の習い事として日本語を学ぶ。一步教室を出れば、すべて現地の言葉を話す彼らは、目標が見出だせない学習意欲に欠ける児童もいた。私の使命は、日本語を学ぶ楽しさを体得し、日本語や日本文化を継承し続ける支援をすること。授業や教材の工夫の提案をしたり、交流・文通事業、漢字検定の導入を企画実施した。

週末は、日系人のイベントでお手伝いをして街の人々との交流も深めた。「日本語の先生」ではなく、「日本人」として、要請があれば、近隣の街までバスを乗り継ぎ、ソーラン節や書道の指導もした。

日系社会の行事では、ブラジルと日本の国歌が歌われ、両国旗が掲揚される。そして、なぜか飾られる大きな鯉のぼり。真っ青な空に鯉が気持ちよさそうに泳ぐ姿は、感慨深いものがある。「かんぱーい」「VIVA!!」「サウージ!!」と3回乾杯する。日系人の住む街には、広場や街のあちこちに鳥居や日本庭園が見られ、彼らにとって、遠くて一番近い国「日本」がそこにある。日本語や文化が継承され続ける日系社会には、力強く日本が息づいている。私はこの2年間で困ったときは助け合い、共に支え合い、笑い合う少しおしゃかいで温かい人々から数えきれない愛情をいただいた。この唯一無二の経験を、より多くの人々に伝え続けていき、より多くの場で役立てたいと考えている。

平成24年度日系社会青年ボランティア（28回生）

職種：日系日本語学校教師

派遣地域：ブラジル サンパウロ州ツバシ市



よさこいソーランを踊りながら日本を体感！

## 第2回 「国際田園都市」 TAKIKAWAの20年後】

### プレゼンテーションコンテスト2014 ～私たちが切り拓くマチの未来～ (12月6日 土曜日 マリアージュインベルコ滝川)



参加者全員で記念撮影



グランプリ獲得に喜びを爆発させる高校生チーム

各チームは制限時間7分間で、現在の滝川市の課題や問題点を分析したデータを用い、地域の未来のために何ができるかを、チームワークを活かして発表。事前に何度も練習して臨んできた真摯な姿勢も伝わってきた。

「巨大アップルパイを作ってギネス世界記録を狙ってみよう」、「コスモスや菜の花を観光の軸にしたい」など豊富なアイディアや具体的な提案があり、会場を沸かせていた。

滝川市のカントリーサインにもなっているグライダーを活かした「Galaxy サマー フェスタ」の開催を発表した北海道滝川西高等学校の「Galaxy TAKIKAWA」がグランプリを受賞した。

昨年は新しい取り組みに不安の声もあったそうだが、滝川に住む若者が、自分たちのマチについて真剣に考え、「このマチを良くしたい」という思いを、審査員である市長や市議会議員の前で発表でき、何よりも、大人側が斬新なアイディアを得られる貴重な機会となったことで、今では多くの人が期待を寄せるコンテストになったとのこと。

最後に前田市長は、「自分たちに不足していた目線がたくさんあり、市役所の企画課に今日の資料を全て渡し、滝川の未来を考えるために役立てていきたい」と講評で述べていた。

今回参加した発表者が、10年、20年後の市政を担う一人になるのかもしれない。そんな可能性を感じられる期待と希望に満ち溢れたコンテストだった。

# 平成26年度 多文化共生 講演会 (函館市)

【講演】  
「人口変動への対処とダイバーシティの促進  
～地域の未来を左右する多文化共生の取組み～」

【事例紹介】  
「外国人材がもたらすチカラと可能性」

報告者：堀 永乃氏 ((一社)グローバル人財サポート浜松代表理事)

講師：田村 太郎氏 ((一財)ダイバーシティ研究所代表理事)

グローバル化が加速度的に進展し、在住外国人が地域社会を構成する一員となりつつある現状を踏まえ、道民と在住外国人が互いの文化や生活習慣などを相互に理解・尊重し、ともに地域の発展・活性化に貢献する多文化共生社会の実現が求められている。そのようなことから、ハイエックでは、道内各地で多文化共生講演会を開催している。去る、平成26年11月18日(火)、(一財)北海道国際交流センター(HIF)と共に開催された。講師2名を招き、函館市(平成26年4月に総務省より過疎指定都市認定)において、多文化共生が地域を存続、活性化させる手法の一つとして考える講演会を開催した。



田村氏による講演

今回は「人口変動への対処とダイバーシティ」と題し、講師に田村太郎氏((一財)ダイバーシティ研究所代表理事)を迎えた。北海道では全国を上回るスピードで少子高齢化が進み、人口構成の急激な変化による人口変動が原因となり、地域の衰退が急速に進行している。持続可能な地域社会の形成には多様な背景を持つ人々が生きやすく、外国人なども活躍できる地域をつくることの重要性がますます高まっていることから、人の多様性に配慮する「ダイバーシティ」社会の推進が重要であると田村氏は強調した。加えて、函館市の人口推移をはじめ、様々なデータを紹介していただくとともに、多文化共生と地域の活性化の取組み等について、参考となる全国の事例があった。

次いで、「外国人材がもたらすチカラと可能性」と題し、堀永乃氏((一社)グローバル人財サポート浜松代表理事)より、在住外国人が地域で活躍している事例紹介がなされた。外国人集住都市である浜松市には、多くの在住外国人が派遣及び請負雇用で働いているものの、正規雇用で安定した生活を望む外国人も多数いるとのことである。最近は、工場からの転職で介護職を希望している外国人が増えているそうだが、最低限の資格として必要な介護初任者(旧ヘルパー2級)研修も、日本語で行われており、外国人にとってはやはり難易度が高いという。それでも、資格取得に挑戦する在住外国人が増えているそうだ。また、日本に居住する外国人の高齢化も進んでいることから、外国人ワーカーの受入れに前向きな施設も増えてきており、多様な人材の活躍による、より丁寧な介護サービスの提供が可能になったとの報告があった。

2時間半という限られた時間であったことから、参加者からは、「大変参考になった」、「もっと両講師の話を聞きたかった」という声が多数聞かれた。



講演会の様子



## ～チカラホから 世界へつながろう！～

(12月13日 土曜日 札幌駅地下歩行空間北3条交差点広場)



インドネシア語版「恋するフォーチュンクッキー」  
を踊る留学生



貧困解決を求める来場者が「スタンド・アップ」に参加

### スタンド・アップとは

貧困解決のための世界的キャンペーン。2000年に189カ国のリーダーたちが合意したミレニアム開発目標達成(MDGs)達成の後押しのため2006年から実施されている。スタンド・アップに賛同した人の様子を写真に収め、1つの「声」をつくる活動にし、政府への貧困解決を求めるだけでなく、参加者も、身近なできることから実践するよう呼びかけるもの。(MDGsが来年に達成期限を迎えるため、スタンド・アップキャンペーンは2014年で終了)

### What's "STAND UP"?



## さっぽろ 研修員・留学生日記

言葉の問題や不安を  
日々の学びの中で一つずつ  
乗り越えたことで  
自信と力につけてきた

岩崎 純理奈さん  
アルゼンチン共和国  
(北海道美容専門学校にて  
「美容技術」を研修)



近藤 山下 アドリアン 貞也さん  
パラグアイ共和国  
(北海道テレビ放送株式会社にて  
「放送技術」を研修)

藤井 みどり マルシアさん  
ブラジル連邦共和国  
(天理大学看護栄養学部栄養学科にて  
「衛生管理」を研究)

平成26年度ハイエック受入の北海道海外移住者子弟留学生及び北海道海外技術研修員は平成26年6月に来道し、それぞれの専門の勉強をスタート。3月には全てのプログラムを終える。

### 日本ってどんな国?

岩崎さんの祖父は江別市、近藤君の祖母は岩見沢市、藤井さんの祖父は札幌市出身で北海道にルーツを持つ3人が、北海道に来るのは今回が初めて。来道前のイメージを聞くと、「おじいちゃんが話してくれたのは、とにかく寒く、汽車が走っているイメージ」と語る藤井さん。岩崎さんは「初めて家族と離れて過ごすので、一人で日本に来るのは少し怖かった」と。近藤君はどうやらかと言うと家族が日本に行くよう勧めていたが、思い切って自ら研修に応募。理由は「日本がどういう国か知りたかった」から。三人が語る日本の印象は、「安全」「車のクラクションの音をほとんど聞かない」「お年寄りが多い」だそう。

### 新しい知識や技術の習得と将来のこと

アルゼンチンで美容専門学校を卒業したが、日本の学校では新しく学んだ科目があり、多くのことを学習できたと実

感している岩崎さん。「将来は自分の住む街でお店を開きたい。そのためにも、最初は自国の美容室で働いて経験を積み、その後日本で学んだ技術を使っていきたいです」と目標を語っていた。

近藤君は「4K放送の編集作業など最新技術を見たり、ドラマやバラエティー制作の現場に入ったりと、異なる部署で貴重な経験をたくさん積むことができました」と語る。研修を受けて一番実感しているのは、テレビ番組の見方が変わったこと。パラグアイのテレビ会社が制作するものは、日本とは少し異なるそうだが、「できるだけ現場で仕事をしたい」と意欲的に語っていた。

「ブラジルでまだ研究されていない菌の勉強ができ、すごく興味を持った」と話すのは藤井さん。「日本の衛生管理のレベルの高さをブラジルに持ち帰り、少しでも反映したい。また、この留学で学んだ分野をブラジルの大学でさらに研究していきたい」と具体的に将来について考え始めたよう。

北海道に来る前は言葉の問題や不安などがあつたに違いないが、日々の学びの中で一つずつ乗り越えたことで自信と力をつけてきたのだと思う。これからの夢や目標を語る三人の表情は非常に頼もしかった。

## 平成26年度「国際交流 in 積丹町」

(11月22日~23日 積丹町)

今年で14回目となる「国際交流会in積丹」(主催:積丹町教育委員会)が11月22日(土)と23日(日)の2日間で行われ、南米出身の北海道海外技術研修員や、マレーシア、ドイツ、中国、韓国、タイなど出身の留学生からなる国際色豊かな11か国12名が同町を訪れた。

当初、町内の観光名所である海岸や岬を1日目に見学予定だったが、あいにくの天候だったため、急きょニッカウヰスキー余市蒸留所を見学。創業当時から使われている機材や石造りの建造物に感激した様子で、家族用のプレゼントにウイスキーを購入する人も。その後、積丹町へ向かい、町の方の温かい歓迎やおもてなしの心に触れ、すぐに積丹町のファンになっていた。



ネパールの留学生に剣玉のコツを教える子どもたち

2日目は、町内の小学校4校と中学校1校を、留学生12名がそれぞれ分かれて訪問。初めて日本の学校に訪れる留学生もいて、最初は緊張した様子だったが、毎年、留学生の来訪を楽しみにしている子どもたちが笑顔で話しかけてくれ、すぐに打ち解けた雰囲気へと変わっていた。各校での交流を終えた留学生は、開始前の緊張が信じられないほど、晴れやかな笑顔になっていた。

今回参加したネパールの留学生は、「子どもたちがネパール語で自己紹介をしてくれ大変に感動し、また自分を迎え入れるために一生懸命準備してきたのが伝わってきた。今すぐにでも子どもたちに会いに行きたいです」と、感激した面持ちで語っていた。

積丹町では14年という長い年数をかけて国際交流を実施しているが、子どもたちが自分よりも年上の留学生を温かく迎え入れる姿は、年数を重ねたからこそその成果であり、また、積丹で素晴らしい経験をした留学生にとっても、一生忘れられない時間を過ごしていた。心と心を通わせ、たくさんの笑顔が弾けた2日間のプログラムとなった。



お世話をした積丹町教育委員会職員の方たちと



公益社団法人  
北海道国際交流・協力総合センター  
HIECC/ハイエック

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館

発行日: 2015年2月10日

TEL. 011(221)7840 FAX. 011(221)7845 <http://www.hiecc.or.jp>

E-mail : [intc@hiecc.or.jp](mailto:intc@hiecc.or.jp) (交流・協力部)

印 刷: 岩橋印刷株式会社